

原離隔は、ある存在者にそれ固有の存立と存続をみとめるはたらしきと解せる。これを導入するための方法論として、ブーバーは、メルクマールの総体がどこにその存在根拠をもつかという問いを提示していた。こうして区別するはたらしきの根拠として導入された原離隔が存在者を存在者として把握させるというが、これは逆にいえば、存在者が存在するという了解において、根源的な隔てが生じているということである。

そして第二に、原離隔とかかわりとは相互嵌入構造を持つていることを指摘する。原離隔に帰された世界を与えるという機能は、ある本質的存在者の現前によって補完されるが、これは、かかわりが生じることによって、世界の世界性が生じるということの意味し、したがって、原離隔とかかわりが相互嵌入構造にあることが伺える。

そうして、第三に、原離隔がことばの基礎として機能していることを確認する。原離隔とかかわりの証拠として、ブーバーはことばの存在を挙げていた。ブーバーは呼びかけと語りかけを区別し、ことばを用いる語りかけが、あくまで原離隔によって可能であることを論じていた。

根源語我ー汝／我ー其れは、すぐれてことばとして存在するゆえ、この基礎として原離隔が考えられると本発表は主張する。

## M・ブーバーにおけるユダヤ教律法の祭儀規定

堀川 敏 寛

ヘブライ語聖書の律法に描写された諸規定の中で、出エジプト記二十九章「日ごとの献げ物」の記述は、前半(三十八―四十一節)は味気ない精確さをもって献げ物の規定が列挙されているが、その記述の後(四十二―四十六節)に文体や語の調子に変化する。「神」や「ヤハウエ」という語が頻出し、それが一人称で語られ、「汝ら」や「イスラエルの民」に対する使信が語られる。つまり事柄に即した規定(Vorschrift)は、最終的に神の教え(Weisung)を民に伝えることが含意されている。

次に、祭儀規定に関するブーバーのドイツ語訳について紹介したい。「全焼の供犠」(*Opfer*)は、「焼き尽くす献げ物」や「燔祭」(*Brandopfer*)と訳される。ただしこの語根 *qan* は「焼く」ことではなく、戦場にて燃え盛り高く昇っていく狼煙などが「高く、立ち昇る」(*Aufsteigen*) ことである。かくて全焼の供儀は、犠牲となるものが焼かれ、煙となって高いところへと上がっていくことを意味する。ここで供儀は、人間と神との出来事であり、この行為を通して神へと導かれるその方向付けが大切である。そこでは煙を高く上げることによって、良き匂いをヤハウエへと献げることが意図されている。「宥めの香り」と訳されている *qan* の語根である *qan* は、「安息する」「落ち着く」ことを意味することから、ブーバーは「共に憩う芳香」(*Ruch des Geruhens*) と訳した。次に「犠牲」(*Opfer*) と訳

される *naħan* の語根は、*naħ* で、それは神に自身を「接近させる、近づける」(*nähern, nahen*) ことを意味する。つまり犠牲は関係概念であり、一方が離隔している時に、他方を近づけることや、一方に近づくことを意味する。そこから犠牲の本来の意味は、遙か遠くに存在するもの同士が近づくことである。ブーバーが *naħan* を「*so*」への接近」(*Dannahung*) と訳した意図はそこにある。最後に「会見の幕屋」(*Tabernakel*) とは、荒野を放浪する際の、持ち運び可能な神の聖所である。*naħan* はテントや幕屋のこと、今まで様々に訳されてきた。七十人訳聖書では「証しの幕屋」、ルターでは「教団の小屋」(*Stiftshütte*)、Kautsch-Bertholet 訳では「啓示の幕屋」(*Offenbarungszelt*) と訳されたが、どれも意味を適切に表現したとは言いがたく、ヴルガータの「契約の幕屋」が辛うじて正しい。*naħan* を構成している語根の *naħ* は、カル系で「会議を手配する」「誰かとどこかで合う約束をする」などの意味があり、正確には「あらかじめ定められた場所で、出会うべくして現れる」ことを指している。つまりこの幕屋は神の臨在がはっきり目の前に思い浮かび、神に謁見できる場である。そこからブーバーは「出会いの幕屋」(*Zelt der Begegnung*) と訳出した。預言者が、言葉を媒介として神の啓示を預かり、それを民に告知する仲介者であるならば、祭司は、礼拝を執行し、神へと犠牲や供物を献げる役割を担う。祭司はこのような具体的な供儀や祭儀を司ることを通した「神—民」関係の仲介者である。それぞれの祭儀規定は、原語の語根まで辿ると、それは神と民との関係を示す概念によって表現されている。ブーバーは、ヘ

ブライ語聖書の独語訳に際して、ヘブライ語が持つその本来の「語義」を際立たせ、馴れ親しんだドイツ語を用いず、原語が持つ意味を残した訳語を考案したのである。

## 「生の宗教」の出現

——ジンメル『宗教』の改訂をめぐって——

深澤 英隆

ゲオルク・ジンメル(一八五八—一九一八)の宗教論の代表作である『宗教』(*Die Religion*)は一九〇六年に初版が、一九一二年に大幅に改訂増補された第二版が出ている。この改訂版において、ある種の「生の宗教」とでも呼ぶべきジンメルの宗教ヴィジョンが、明瞭に姿を現す。

ジンメルがこの生の宗教の立場には、①生の宗教の方法論、②生の宗教の超越論的生成論、③生の宗教の存在論、の三つのアスペクトが見分けられる。

①の領域においては、ジンメルはP・バーガーのいわゆる「方法的無神論」に近い立場をとるとともに、宗教の真偽問題のポストとも言うべき地点を探っているようにも見える。

②の領域においては、宗教を「宗教性」(*Religiosität*)という主観性のアプリオリな領域の解明を通じて基礎づけようとの関心が明らかである。この際にジンメルの議論の特徴をなしているのは、宗教的な経験カテゴリーが結合する経験内容自体が、すでに先行的に宗教的カテゴリーによって規定されている